玉虫色に淀んだ前頭葉、喘うピエロ。

舞台ヘソよりやや後方にイスが一つ。
暗闇の中、穂乃花の悲鳴。その声は徐々に大きく。
最高潮で「ブチッ」という音。明かりがつく。
穂乃花がイスに縛られている。両手の人差し指と中指が赤い。
両脇には「口元が開いたピエロの仮面」を被った女1と女2がペンチを持って立っている。ペンチを開くと爪が落ちる。付近にはもう一枚すでに爪が落ちている。

穂乃花　…なんで…なんでこんな事するの？
女1　「なんで？」って、それはこっちの台詞でしょ。
女2　優しいと思うけど。ちゃんと待ってあげてるんだから。
女1　ねぇ。
女2　（頷いて）…そんな風に言うならもう次行く？

女2、ペンチを薬指に近づける。

穂乃花　待って、待って、待って!!(否定する言葉なら何でも可)
女2　でしょ?だから待ってあげるんだからさ。
穂乃花　・・・何でこんな事するの?
女2　え、そこ?
女1　あー、一枚目で気ィ失っちゃったしね。飛んじゃったか。
穂乃花　・・・何?
女1　これはね、あんたが自分で望んだ事なの。
穂乃花　・・・私が?嘘。
女2　嘘じゃないわよ。アンタ私達に証明するんでしょ?だからテストしてるんじゃない。
穂乃花　・・・何を言ってるの?
女2　ダメだこりゃ、完全に飛んじゃってる。
女1　しょーがないわね~。少し時間をあげる。だからちゃんと思い出しなさい。あんたは何でここにいるのか。そして何を証明しなきゃいけないのか。まず・・・(考える)
女2　まずあんたの名前は?
穂乃花　・・・穂乃花。

女1、片側の口の端をつり上げて笑う。
女2、口角を上げてにっこり笑う。

女1　そう。
女2　穂乃花。
女1　思い出しなさい。
女2　そんなに過去の事じゃなくて大丈夫。
女1　例えば今日の朝。
女2　今日の朝は
女1　どんな感じで始まった？

音楽。
穂乃花、ゆっくりとうなだれて眠る。
女1と女2、笑いながら穂乃花の周りを回る。
やがて女1は上手後方に、女2は下手後方に下がり前を向く。
照明変化。明るくなり、朝になる。
穂乃花、目を覚まし、伸びをして立ち上がる。

穂乃花　おはよう。・・・うん。・・・パンとコーヒーでいい。

少し下手に移動し、パンをトースターで焼くマイム。

穂乃花　お湯湧いてる？・・・お母さんも飲む？

返事があったのか軽くうなずく。一人分のコーヒーを用意。
パンを皿に置き、マグカップを持ってイスに戻る。

穂乃花　・・・いただきます。

穂乃花、パンを食べ始める。無言。たまにチラッと母親がいるであろう方向に目を向ける。や４がてマグカップに手を伸ばすが、カップを落としてしまう。

穂乃花　あっ‼

マグカップの割れる音。コーヒーの広がる床を見る穂乃花。
急にビクッとして顔を上げた後、絶望的な顔をする。
次の瞬間、照明変化。陽気な音楽。
女２が仮面を取り前へ。

女２　エスエム‼それは気持ちと気持ちのぶつかり合い‼想いの全てを鞭に込め、想いでそれを受け止める‼限界を超えてどこまでも突き進むその行為は究極の愛‼愛‼愛‼「ホ～ラ、女王様とお呼び‼」「あぁ、女王様～‼」なんて軽い世界じゃないのよ‼エスエムは生き様なのよ‼人生そのものなのよ‼痛ければ痛い程、苦しければ苦しい程、その愛は深く相手に刻み込まれる・・・。エスエム‼それは究極の愛‼愛‼愛‼

女１、仮面をつけたまま前へ移動し、女２の近くへ。ムチを振る仕草。

女１　ピシャ‼さぁ、女王様とお呼び‼
女２　女王様～‼
女１　またあんたかい。欲しがりな卑しい雌豚だね‼ホラ「ブヒブヒ」言ってごらん‼
女２　ブヒブヒ‼
女１　ガツつくんじゃないよ‼今日は言葉責めとムチだからね‼覚悟しな‼
女２　ご馳走様で～す‼
女１　まずは上手‼

女１、女２、上手へ移動。

女2、上手の客席に向かって四つん這いになる。女1は女2のお尻のすぐ後ろに立つ。ムチを両手で張るマイム。ポーズが決まったら

女1　笑う度に顎をしゃくれさせるんじゃないよ‼

セリフの言い終わりと同時にムチを振る。女2「ブヒッ‼」で応える。

女1　モハメドアリと闘ってるときのアントニオ猪木よりしゃくれてるじゃない‼
女2　ブヒッ‼
女1　今度分度器で角度測ってやるから覚悟しな‼
女2　ブヒ～‼
女1　今度は下手‼

二人下手に移動し、同じポーズの後、

女1　男の体で好きなパーツが「ふくらはぎ」ってマニアックすぎるんだよ‼
女2　ブヒッ‼
女1　「良い匂いは好きですけど、本当はちょっと臭いくらいの方がいいです」って完全に変態じゃな

女２　い‼
女１　ブヒッ‼
「最近一人が寂しすぎて女の人もありかなって思ってきたんですよね」って飲み会の度に言うのやめなさいよ‼
女２　ブヒ～‼
女１　三回目から返事に困るのよ‼
女２　ブヒ～‼
女１　最後はセンター‼

二人移動してセンターで同じポーズ。

女１　いくわよ‼
女２　あの‼
女１　何⁉
女２　これ以上のマジ暴露は正直きついっす。
女１　何ですって⁉豚が女王に偉そうな口聞いてるんじゃないよ‼（ビシッ）
女２　ブヒッ‼
女１　なら望み通り痛みと苦しみだけ与えてやろうじゃないか。ホラッ‼ホラッ‼ホラッ‼

女1、三回ムチを振る。

女2　この痛み幸せですー‼
女1　痛みが幸せかい‼とんだ変態雌豚だね‼（ビシッ）
女2　はい‼幸せです‼この痛みは愛情の証です‼
女1　そーかい。痛みは愛情かい・・・。ならもっと愛情欲しいわよね⁉
女2　はい、欲しいです～‼
女1　ならタップリ与えてやるよ‼

女1、何度もムチを振る。その雰囲気は段々本気モードに入っていく。女2は反応しなくなり女1だけが大きくムチを振る。肩で息をしながら、女1はムチを両手で張る。

女1　良く耐えるじゃないか。褒美に苦しみもあげようかね。
女2　・・はい、苦しみも欲しいです。
女1　痛みよりも苦しみの方が、
女2　より愛情を感じられます。
女1　本当に気持ち悪い子だね・・・。

女1、ムチを女2の首に巻きつけて締め始める。苦しみに耐える女2。女1は全力で締め続ける。女1の体力が限界になった時、

女1　どーだい？嬉しいかい？
女2　嬉しい。・・・愛情たくさんだね。

女1、その言葉を聞いた瞬間、パッとムチを離す。

女1　今日のプレイはここまでだよ‼

照明変化。穂乃花、後方から

穂乃花　行ってきまーす‼

女1、女2それぞれ元の後方へ下がる。女2はピエロの仮面をかぶる。
穂乃花、立ち上がり前へ。最初は明るく軽快な足取りでその場歩き。
段々元気がなくなり、最終的には下を向いてトボトボ歩く。

学校のチャイムの音。穂乃花、後ろを向き、教室のドアを開ける。
効果音「ガラガラ」。

穂乃花　おはよう・・・。

返事は無いようである。イスに移動。
が、そこには机が無い。辺りを見回す。付近にいる人に話しかける穂乃花。

穂乃花　しゅうちゃん。私の机知らない・・・？ねぇ、しゅうちゃん私の机・・・

キツイ返事が返ってきたのか、ビクッとする。

穂乃花　だって前からしゅうちゃんって・・・。

相手が何か返してきているのか、話を聞く。その言葉に下を向く穂乃花。少し黙ってから、

穂乃花　修平く・・・。・・・北川君、私の机知らない？・・・そう・・・。

効果音「ガラガラ」
先生が入って来たのか、穂乃花客席側を見る。先生が近づいてきたようでしだいに下を向く
穂乃花。

穂乃花　…わかりません。来た時からありませんでした。…いえ、昨日帰るときにはありました。…わかりません…。…え!?

意外な事を言われたのか、思わず先生の顔を見る。やがて下を向く穂乃花。

穂乃花　…いえ。…すみません。…はい。…はい。…わかりました。

穂乃花、イスに座る。どうやら机は用意してもらえない様子。クラスの笑い声。
効果音「笑い声」
穂乃花、立ち上がる。クラス全員立ち上がる。効果音「イスを引く音」

穂乃花　先生、おはようございます。皆さん、おはようございます。

穂乃花、イスに座る。前を向いて授業を受ける。効果音「時計の音」。

照明変化、少し暗くなる。効果音「チャイムの音」。
子供たちが外で楽しく遊んでいるのか、笑い声がする。効果音「子供たちの笑い声」。
その後悲鳴。
その間も、穂乃花はじっとイスに座っている。照明変化、更に暗くなる。
効果音「チャイムの音」。穂乃花立ち上がる。

穂乃花　先生、さようなら。皆さん、さようなら。

穂乃花、おじぎをして帰ろうとするが、呼び止められたのか止まる。

穂乃花　はい？

穂乃花、面倒くさそうに返事。
照明変化。一気に明るくなる。
女１「異議あり‼」女1が仮面を取って前へでる。（正確には明るくなる前）

女１　今検察が言った事は全て的外れであり、本件の本質を全く理解しておりません。
女２　何だって⁉

女2、仮面をつけたまま前へ。

女1　被告を見てください‼よーく見てください‼特にココ‼ココをよーく見てください‼

女1、穂乃花の顔近辺をクルクル指す。

女2　彼女の顔がどうだと言うんだ‼

女1　分かりませんか？私は未だかつてこんなに立派なメンヘラ顔を見た事がない‼

女2　おぉ‼言われてみれば確かに‼

女1　事実彼女は自他共に認めるメンヘラです。例えば・・・。

女1、ファイルをめくるマイム。

女1　お付き合いする相手には一日平均50回は着信を入れ、メールは毎回文章を変えて三十件。基本的には即返信を希望し、思い通りにならないと泣く・物を投げるのダブルコンボです。

女2　ま、まぁ、そのくらいなら「ちょっと甘えん坊レベル」と言えない事も無いのでは？

女1　また、彼の一部を所有していたい気持ちから、部屋に訪れてはゴミ箱を物色し、切った爪を

持ち帰り、日付を書いて保管した事があります。
女２　それのちょっと行き過ぎたバージョンですよ。
女１　逆に自分の一部を彼に与えたいという気持ちから、自らの髪の毛を切ってこま切れにし、卵焼きの中に入れてふるまった事があります。
女２　サイコパスじゃん。ぶっちゃけ何度聞いても引くわー。
女１　つまり、それだけ破壊力抜群の地雷女である彼女と付き合うのなら、それなりの覚悟があってしかるべきであり、刃物で斬られたからと言って大事にすべきではないのです。何故ならこれは傷害事件ではなく、彼女の愛情表現なのですから‼
女２　しかし被告は複数回にわたり刃物をですね‼
女１　それだけ愛情が深いのでしょうなぁ。
女２　バカな⁉
女１　「バカ」とは失敬な‼そもそも愛する二人の間に法が絡んでる事自体がバカバカしいのです。どのカップルにも一つや二つあるでしょう。二人にしか分かり得ないルールみたいなものが。
女２　それは・・・。
女１　エスエム好きなカップルがいたとして、ムチでたたく事を暴力と言いますか？二人ならきっとこう言うでしょう。「これはプレイである！」と。

女２　刃物で何回も斬るのは
女１　ハードなプレイですなぁ。
女２　バカな⁉
女１　まだ分からないのですか？マニアックなプレイというのはカップルの数だけ存在するのです‼あなただってそうでしょう。頭皮の脂のニオイをかいだりと・・・
女２　うるさーい！
女１　彼の脱ぎたての靴下のニオイをかい・・・
女２　うるさーい‼ってか、今回は斬られたＡ氏が起訴してるんですよ？
女１　嘆かわしい・・・実に嘆かわしい。いいですか？二人にとって斬る斬られるはプレイなのです。当然起訴もプレイと捉えるのが道理でしょう。それを検察がマジになっちゃうもんだから引いてると思いますよ、彼女は。
女２　裁判長‼弁護側の言っている事は滅茶苦茶です‼争点をずらし罪を有耶無耶にするのが目的と思われます‼
女１　罪を有耶無耶？違います。やはりあなたは何も分かってない。いいですか？私は罪を有耶無耶にしようとしているのではない。本件がそもそも罪に値するかどうかを問うているのです‼
女２　何だって⁉
女１　プレイを仕掛けた彼女。それをその身で余す事無く受けたＡ氏。そしてプレイの一環である

女２　事を見抜けもせずにマジになってしまった検察。果たしてこの中で一番悪いのは・・罪深いのは誰なんでしょうね・・。

女１　検察が悪いとでも⁉

　　検察を代表しているかのような口ぶりはやめて頂きたい‼個人です‼今、目の前にいる「こんな案件にマジになってしまったあなた個人」に申し上げているんです‼

女２　これは侮辱だ‼今すぐ謝罪と撤回を要求する‼

女１　そのどちらも拒否します。

女２　何故⁉

女１　あなた‼・・・もしかして御自分が「出来る人間」だと思っていませんか？

女２　え？

女１　小さい頃から正義感が強く、勉強の出来たあなたは司法試験にも一発で合格した事でしょう。しかしいざ裁判の場に立つと現実に打ちのめされた。お金や地位、権力を持つ者が無罪になる理不尽な判決。逆に出生地や家庭環境、雇用形態などで弱者は差別的な判決を下される。夢に描いていた正義はここには無かったのです‼だから自分だけでも青臭くて薄っぺらい理想論を失わないよう、どんな事件にも敢えてマジになってきた。違いますか？違いませんよね。ですからそれはあなたの狭～い視野の話なんです。リアルな裁判とはもっと汚くてドロドロしたものなのです‼お花畑全開で綺麗なものしか見ようとしない、表層的で独善的で偽善的なあなたに正義などありませんよ‼それも分からず気付かず、今までよくやっ

てこれましたね！あ、思考が止まってるんだから当然ですか‼あなたの正義で人が救われるなんて事はありませんよ、絶対にね‼

女2、女1の台詞の途中からうなり声を上げ、台詞の終わりと同時に手を振りかざしながら女1に突進。女1が女2に殴られる直前で穂乃花・女1・女2、同時に悲鳴を上げる。全員、一瞬ストップ。
穂乃花、その場に倒れる。女1仮面をつける。
女1と女2、穂乃花を抱えてイスに座らせる。
照明変化。しばらくして目を覚ます穂乃花。

穂乃花　：分かんない。
女2　分かんない？
穂乃花　今日はいつもの時間に起きてご飯食べて、いつも通り学校行って…。
女2　そりゃ分かるわけないよね。…だって肝心な事は何も思い出してないじゃん。
穂乃花　…え？
女2　あんたもしかしてこれ以上酷い事されないと思ってる？
女1　だとしたら甘い考えは早めに捨てた方がいいかもね。

女1・女2、穂乃花の中指の爪をペンチで挟む。

穂乃花　待って、もう痛いの嫌だ!!

女2　なら早く思い出してよ。本当は私だってこんな事したくないんだから。

穂乃花　だって思い出せないもん!!今日はずっと普通の日だった!!

女1　普通の日？今日が普通の日・・・。

穂乃花　何!?ねぇ、教えてよ!!今日何があったの!?私こんな事されないといけないような事した!?

女1　だからそれは自分で思い出さなきゃ。

女1・女2、ペンチに力を込めて爪を剥がし始める。

穂乃花の悲鳴。効果音「ブチッ」。爪を剥がしきる。

穂乃花　痛い～!!痛い痛い痛い痛い痛いー!!（「痛い」を繰り返すなら何度でも言い方も変更可能）

穂乃花、大声で叫ぶが、やがて疲れて落ち着く。しかし痛みは継続している為、うめき声を上げ続ける。しかしそのうめき声も止まり、静寂。

穂乃花　・・思い出した。放課後、先生に呼び止められて・・・

女１　それで？
穂乃花　何を話したかは覚えてないけど、・・・私、途中で倒れた。
女２　それで？
穂乃花　救急車の音・・・私、運ばれて・・・それで・・・。
女１・２　それで？
穂乃花　それで気付いたらお医者さんが目の前にいて・・・。

照明変化。女１・女２、少し前へ出る。

女１　・・・穂乃花ちゃん？・・・えーと・・・穂乃花ちゃんでいいのかな？
穂乃花　・・・はい。
女２　気分はどう？
穂乃花　・・・少し頭がクラクラします。あとちょっと気持ち悪いです。
女１　そう・・・。ここが何処か分かる？
穂乃花　・・・病院。
女２　学校で倒れてしまってね、運ばれて来たんだよ。
穂乃花　（医者の方をジッと見て）・・・あれ？・・・（その後ハッとして）今、何時ですか!?
女１　今は・・・8時40分。

穂乃花　・・あの・・お母さんは？

女２　お母さんは・・居ないよ。

穂乃花　迎えに来てないんですか⁉・・・じゃあお家に居るんだ・・・。すみません、もう帰ってもいいですよね。もう大丈夫なんで。

女１　どうしたの急に。

穂乃花　帰ってお皿洗わないと、怒られちゃうから。

女２　家のお手伝いをするのは感心するけど、流石に帰宅は認められないな。今日は一日入院してもらうよ。

穂乃花　もう大丈夫ですから。

女１　それを判断するのは医者である僕だ。日常生活を送っていて倒れるっていうのは余程の事なんだから。ちゃんと検査しないと。

穂乃花　でも本当にもう。

女２　何をそんなに怯えているのかな？

穂乃花　別に・・怯えていません。ただお皿を洗わないと‼

女１　学校で倒れたんだよ？お母さんだって分かってくれるさ。

穂乃花　ダメです‼どんな事があったって言われた事はちゃんとやらないとダメなんです‼じゃないと‼

女２　・・・・じゃないと？

穂乃花、下を向いて黙ってしまう。

女１　ところで・・・穂乃花ちゃんは学校では活発に運動する方？
穂乃花　・・・え？
女２　お友達とは一緒に外で走り回ったりする？
穂乃花　・・・いいえ。
女１　そう・・・。じゃあ・・・その体中についてるアザはどうしたの？
穂乃花　これは、
女２　点滴をうつ時に腕のアザに気付いてね。悪いと思ったけど調べさせてもらったよ。腕だけじゃない。背中や足にもついているね。・・・これはどうしたの？
穂乃花　・・・これはこ・・・
女１　転んで出来た訳じゃない事だけは確かだね。・・・もしかして誰かから暴力を受けてる？
穂乃花　違うんです、これは、
女２　大丈夫だから正直に言って欲しい。親から暴力を受けているかもしれない子を放っておけないからね。
穂乃花　これは・・・。
女１　娘が倒れたというのに迎えにも来ないなんて。これは精神的にも虐待だ。

穂乃花　違うんです!!私がいっつも言う事聞かないから、叱られるのはしょーがないんです!!私が悪いんです!!

女２　だからといって暴力を振るっていい理由にはならない。

穂乃花　それならいつもお姉ちゃんが代わりに受けてくれます！お姉ちゃんにとってはご褒美なんです!!

女１　…お姉ちゃん？

穂乃花　いつも守ってくれる優しいお姉ちゃんです。

女２　…もう一つ質問なんだけど…。

穂乃花　…はい…。

女１　その手に持っているカッター、血が付いてるね。…穂乃花ちゃんに切り傷は見当たらなかったんだけど…誰の血かな。

穂乃花　これは…上のお姉ちゃんがやりました。

女２　…上のお姉ちゃん…。

穂乃花　私がグズでクラスの笑い者だから私の代わりにやっちゃったんです。でも私の為にしてくれた事です。本当は下のお姉ちゃんと同じくらい優しいんです!!　…あの…何か？

女１　穂乃花ちゃん…落ち着いて聞いて欲しい…。穂乃花ちゃんにお姉さんはいない。

穂乃花　え？

女２　君は…一人っ子だ。

照明変化。激しい音楽。

女１　やっと思い出したのね。
女２　そう、あんたには二人の姉なんかいない。
女１　なら姉だと思っていた二人は誰？
女２　その体のアザは誰がつけた⁉
女１　カッターについてるのは誰の血？誰がやった⁉

女1、女2、再びペンチで穂乃花の爪をはさみながら、

女２　さぁ、もう一度思い出して‼今度は文字通り死ぬ気で‼
女１　脳の奥の奥にしまってある記憶に手を伸ばして‼

女1、女2、力を込めて爪を剥がし始める。

女１・２　さぁ、全てを思い出しなさい‼

女1・2、大声を上げながら穂乃花の爪をはがす。
穂乃花の悲鳴。効果音「ブチッ」
穂乃花、気を失う。
照明変化。（暗くなる）
女1・女2は後ろへ下がる。
穂乃花、頭をもたげたまま、静かに語り出す。

穂乃花　・・・あの日・・・私はいつも通り目覚ましで目を覚ました。着替えて台所に行くとお母さんが居たから「おはよう」って声をかけて・・・。それから朝御飯。・・・そうだ、あの時コーヒーをこぼしたんだ。私朝が凄く弱くてボーっとしちゃうから、今週はこれで三回目・・・。気付いたお母さんが怒って近付いてきた。そしたらお姉ちゃんが出てきて私をかばってくれた。・・・「出てきて」？それまでお姉ちゃんはどこに居た？かばってくれたならこのアザは？・・・ううん‼お姉ちゃんはかばってくれた‼それは絶対‼助けてくれたのに‼どうして⁉どうして‼

女2、仮面を取り、後ろからゆっくり優しく穂乃花を抱きしめる。

穂乃花　・・・え？

穂乃花、顔を上げて女2を見る。女2、笑う。

穂乃花　そっか・・・お姉ちゃんは・・・。

女2、穂乃花の前に立ち両手で耳をふさぐ。

穂乃花　お姉ちゃん、いつもそうやってくれてたね。嫌な事は何も見えないように前に立ってくれた。嫌なものは何も聞こえないように耳をふさいでくれた。そして・・・痛い事から守ってくれた。

女2、客席の方を向く。効果音「ガシャン」

女1、前に出てくる。女1、女2に向かって、

女1　・・・穂乃花？あんたまたこぼしたの⁉お前は本当に毎日毎日・・・‼

女1、女2に近づいてたたく。

女1　何、私に当てつけてんの⁉カップは両手で持てって言ってるでしょ⁉

女1、女2の両手をたたく。以降台詞に合わせて要所要所でたたく。

女1　この手で!!両手で!!何度言えば覚えんの⁉やっと変な癖が直ったと思ったら、何回も同じ事言わせて手間かけてイラつかせるし、本当何なの？あんたもお父さんみたいにバカにしてんでしょ。死ねよマジで。

女1、最後にビンタ。女2、ゆっくり笑う。

女1　・・何その顔。何笑ってんのよ。
女2　この痛みが幸せだなって。
女1　は？
女2　痛みは愛情だから。私、お母さんに愛されてるなって。
女1　本っ当ムカつくガキだなお前!!何が愛情だよ。お前なんか産んで後悔してんだよ!!お前さえいなきゃ!!お前さえ産んでなきゃ私は自由だったんだよ!!死ねよお前!!とっとと死んで私を楽にさせろよ、なぁ!!

女1、女2をたたきながらセリフ。女2、笑って。

女２　私が死んだらお母さん楽になる？
女１　だからその顔やめろよ。マジキモいんだよ。ってかマジ殺してやろうか・・・。

女１、女２を数回たたき、最後の一発で手を痛める。

女１　いったぁ・・・。マジムカつく‼

女１、女２を蹴る。女２倒れる。女１、女２を何度も蹴った後、一呼吸ついてから首を締める。

女１　どう？苦しいでしょ。このままだと本当に死ぬよ。どうせ要らない子だし、殺してどっかに捨ててやろうか。

女２、ゆっくり両手を女１の手に添える。

女１　何、やめて欲しいの。死になさいよ。それがお母さんの為になるんだから。
女２　・・・嬉しい。・・・愛情たくさんだね。

女１、その瞬間に両手を離す。

女1　何それ・・・何なのよそれ‼泣き叫んで助け呼びなさいよ‼鬱陶しいのよ、いつも‼私に関わらないでよ‼そっとしといてよ‼

女1、倒れ込むが両手で支える。下を向いて呼吸を整える。

女1　自分で産んだ子なのに・・・どうしても可愛いと思えないのよあんたの事が・・・。今日はもういいから、学校行っといで。

女2、女1に近付こうとするが途中でやめて

女2　・・・行ってきます。

女2、そのまま後方へ。女1もゆっくり立ち上がり後方へ。

穂乃花　それから学校に行って・・・そしたら机が無くなってた。イジメはいつもの事。平気な訳じゃないけど慣れてる。どんな事されるかなんて想像つくし、前もって覚悟してたら耐えられるから。でも・・・あの日はしゅうちゃんが・・・。幼なじみだったしゅうちゃんがあんな裏切りをす

るなんて・・・。「あだ名で呼ぶな」「名前で呼ぶなんて馴れ馴れしい」って。多分、私に酷い事を言う事で笑いをとろうとしたんだと思う。

子供たちの笑い声。穂乃花、耳をふさぐ。笑い声小さくなる。

穂乃花　クラス中の笑い者にされて・・・私、悲しくて恥ずかしくて教室から逃げたかった。先生はいつも何もしてくれない。机が無いならそのまま過ごせって・・・。私はヒザの上にノートを置いて半日を過ごした。

穂乃花、姿勢を正す。効果音「キンコーンカンコーン」

穂乃花　ずっと恥ずかしい思いをしながら授業を受けてやっとお昼休み、私は一人で教室にいた。外からは楽しそうな笑い声。

子供たちの笑い声。再び耳をふさぐ穂乃花。しかし音はそのまま。

穂乃花　どんなに強く耳をふさいでも笑い声は消えなかった。別に私を笑ってる訳じゃない。私に対する笑い声じゃない。分かってるけど、意識すればする程頭に響いてきて・・・。

笑い声、一瞬一番大きく。

穂乃花　何か面白い事があったのか笑い声がひときわ大きくなった。その瞬間私の気持ちに変化がおきた。どうしてかは分かんない。分かんなけど、恥ずかしいって気持ちから・・・ムカつくって気持ちに切り替わった。あれはきっとお姉ちゃんが助けてくれたんだね。

穂乃花、カッターを取り出す。効果音「チキチキチキ」（カッターの刃を出す音）

女1、仮面を取り、カッターを持ってセンターへ。

女1　しゅう君・・・。朝さぁ、何であんな事言ったの？いっつもしゅう君って呼んでるじゃん。何で？・・・ねぇ聞いてる？何であんな事言ったの⁉しゅう君・・・。しゅう君ってば・・・。ねぇ・・・。ねぇ‼　・・・いっつもしゅう君って呼んでるよね？・・・何で？・・・何であんな事言ったのか教えてよー‼

女1、後半になるにつれ絶叫。カッターを振り回す。周りからは悲鳴。効果音「悲鳴」

女1　おかしいじゃん急にあんな事言い出すなんて‼あんなんで笑いとって嬉しいわけ⁉幼なじみ

なんだから私の味方するべきでしょ、違う⁉違わないよね⁉じゃあダメじゃんあんな事言ったら‼ゴメンなさいは⁉ゴメンなさいはー⁉

女1、何度もカッターを振り、疲れたのか止まる。一度大きく深呼吸をし、スッキリしたのか笑顔になる。

女1　…帰ろ。…先生、さようなら。皆さん、さようなら。

女1、去ろうとするが、女2が声をかける。

女2　穂乃花ちゃん。

女1、立ち止まり面倒くさそうに振り返る。

女1　…はい？

女2　どうして帰るの？まだ授業残ってるでしょ。

女1　具合悪いんで帰ります。

女2　それなら一度保健室に行こうか。

女１　いえ、大丈夫なんで。（行こうとする）
女２　待って。ちょっと今日はこのまま帰す訳にはいかないなぁ。
女１　・・・何でですか。
女２　ほら、北川君に・・・ねぇ。何であんな事したのか聞いておかないと。
女１　しゅう君は何て言ってるんですか？
女２　まずは穂乃花ちゃんの話を聞こうと思って。
女１　順番がおかしいですよ。まずしゅう君の話を聞くのが先じゃないですか？
女２　・・・どうして？
女１　起こった事象には必ず原因や理由というものがあるんです。
女２　・・・北川君に原因があったって事？・・・一番仲の良かった北川君がイジメられてる穂乃花ちゃんを守ってくれなかったから・・・
女１　違います。先生は本質を全く理解してませんね。
女２　だってカッターを振り回してる時、穂乃花ちゃんが言ってたじゃない。
女１　見てたんですね。
女２　え？
女１　まぁ、いいです。それより修正しておきたいんですけど、しゅう君が私を守ってくれなかった事に怒った訳じゃありません。しゅう君って頭良いですよね。子供なんて面白い人にむらがります。それが分かってるからしゅう君は私を使って笑いを取ろうとしたんです。私はね、しゅ

女２　う君が私を利用したことに腹を立てたんです。
女１　だからってあんな危険な事‼
女２　先生。・・・イジメという行為もまた同じくらい危険だとは思わないんですか？
そうね・・・それに関しては穂乃花ちゃんの言う通りね。だったら一度柴田さんとよく話し合えば
女１　何でそこで直美ちゃんが出て来るんですか？。
女２　・・・え？・・・え・・・。
女１　やっぱり知ってたんですね。・・・知ってたというより見てたんですね。直美ちゃん達がイジメをしてるの。
女２　それは・・・。
女１　そもそも先生は何で私にばっかり言うんですか？
女２　だからそれは！
女１　クラス中に注意するより私一人に我慢するよう言いきかせた方が楽ですもんね。味方のふりすれば騙せると思いました？私からすれば問題を解決しようとしない先生は、いじめを見て見ぬふりしてるその他大勢のクラスメイトと同じなんですよ。
女２　それは誤解よ。先生はもっと大きな視野で物事を捉えてるの。
女１　具体的には？
女２　・・・何が？

女１　いや何がじゃなくて。「大きな視野」というのは具体的にはどういう事ですかって聞いてるんです。
女２　それは今ここで話す事ではないでしょ。
女１　（大きくため息をついて）イジメをする人。イジメをされる人。イジメを見ているだけの人・・・。一番悪いのは・・・罪深いのは誰なんでしょうね。
女２　先生が悪いっていうの⁉
女１　先生ってもしかして・・・自分の事「良い先生」だって思ってませんか？
女２　（少し苛ついて）・・・は？
女１　先生になったきっかけって、小さい頃に見たドラマとか漫画だったんじゃないですか？問題のある生徒に真正面からぶつかっていく主人公に「私もこんな事やってみたい」って夢みたいな事考えて、そのまま本当に先生になったパターン。教科書と問題集で生きてきたから人間が薄っぺらいんですよね。「人が見れてない」っていうか。で、実際に現場に出てみたら理想と全然違ったと。
女２　やめなさい。
女１　生徒は何の変哲もない子供ばかりだし。問題があるとすれば保護者からの理不尽なクレーム。おまけに先生同士でも変な縄張り意識や派閥があった。
女２　やめなさい！
女１　そんな中、いざイジメという問題が起きてみれば、どう解決すれば良いのかわからない、た

女２　だただ面倒くさいものだったと。
女１　黙りなさい。
それなら見て見ぬふりをしよう。明日までにテストを作らなきゃいけないし、他の先生から呑みにも誘われている。保護者からのクレーム処理もしなきゃいけないし、部活も見なきゃいけない。最近は全然自分の時間が持ててないのに、また新しい問題を抱えたら何も出来なくなってしまう。私はまだ若いんだから遊びに行きたいし好きな事に時間とお金を使いたい。だから見て見ぬふりをしよう。
女２　黙れって。
女１　自分の無能さを棚に上げて、生徒の問題と向き合えない先生に、生徒を育てるなんて事は出来ませんよ、絶対にね‼

女2、女1の台詞の途中からうなり声を上げ、台詞の終わりと同時に手を振りかざしながら女1に突進。
途中、女2、仮面を外して、

女２　殴られるなら私の出番よね⁉
穂乃花　（急に立ち上がって）私‼
女１・２　え⁉

女1・女2、穂乃花の方を向く。3人、ゆっくり倒れる。
女1・女2、仮面をつけて立ち上がる。

女2　その瞬間、二人のお姉さん、そして穂乃花ちゃんという三人の人格が一つの脳で覚醒してしまったんだ。意識を失ったのは脳が負荷に耐えられなかったんだと思う。
穂乃花　…そうですか…。
女1　あの時、どうして穂乃花ちゃんは目覚めようとしたのかな？
穂乃花　…分かりません。
女2　これは僕の憶測なんだけど…穂乃花ちゃんは心の中ではお姉さん達が別の人格である事が分かってたんじゃないかな。いつも守ってくれるお姉さん達に感謝はしつつも、自分の人生を歩めていない事に多少なりとも不満があったと思うんだ。
穂乃花　不満…ですか？
女1　穂乃花ちゃんにとってツラい事を引き受けてくれるとはいえ、別人格の時は穂乃花ちゃんは眠ったままだ。自分の人生を生きているとはいえないんじゃないかな。人間というのはね、嬉しい時だけじゃなくて、悲しい時やツラい時にも「生きている事」を実感するものなんだよ。
穂乃花　…はい…。

女２　でも穂乃花ちゃんは二人のお姉さんによってそのバランスが崩れてしまった。人間なら「自分の人生」を生きたい、そう思うのは当然の事なんだよ。

穂乃花　…そうですね…。…そうかもしれません。私、強くならなきゃって思ってたんです。ツラい事も自分で受け止めなきゃって‼ちゃんとしなきゃって‼だってこれは私の人生だから‼だからあの時‼

女１　穂乃花ちゃんは…自分の人生を取り戻したい？

穂乃花　…はい。取り戻したいです。

女２　それなら穂乃花ちゃんはお姉さん達に証明しなきゃいけない。この体は私のものだって。私は一人でやっていけるって。

穂乃花　証明…。

女１　お姉さん達からすれば理不尽に感じるかもしれない。今まで穂乃花ちゃんのことを守ってきたわけだからね。でもその体は元々穂乃花ちゃんのものだ。主人格っていうのはね、特別な存在なんだよ。

女２　で…もし穂乃花ちゃんが望むなら、僕が力を貸してあげるけど、どうする？

穂乃花　あの、今ですか？

女１　早い方がいいだろうね。今を逃すとまたお姉さん達の存在を忘れてしまうかもしれない。

女２　覚えている内にちゃんと話すのがお姉さん達のためにもなると思うよ。

女１　勇気を出して頑張ってみよう。ね？

穂乃花　…はい…。

女２　じゃあ今から催眠術をかけるから。お姉さん達に会って、「この体は私のものだ！」「もう一人で大丈夫だ」って強い意志で証明しておいで。

穂乃花　…はい。

女１　そして目が覚めたら…んー。第一声は何て言うのかな…。「おはよう」かな。全部終わってスッキリした君なら、きっと「おはよう」って言うはずだよ。

穂乃花　（困惑しつつ）…ですかね…。

女２　だからまずは…おやすみ。

照明徐々に暗くなる。

女1、女2指を鳴らすポーズ。暗転になったら指を鳴らす音が聴こえる。効果音「パチン」という指を鳴らす音。暗転の中、穂乃花の悲鳴。明かりが付く。

穂乃花　思い出した…。全部思い出した。

女２　ならさ、ここに来た時の台詞、もう一度言ってみなよ。（穂乃花が無言なので）言いなさいよ！

穂乃花　…私…。

女２　何。…「私」何？…「私」が何なのよ、言えないの⁉

穂乃花　私自分の人生を生きたいの。
女２　は、何それ。私達が穂乃花の人生邪魔してるっていうわけ？
穂乃花　そうじゃない。お姉ちゃん達には感謝してる。本当に感謝してる。でも・・・。
女２　「でも」何？
穂乃花　私・・・大丈夫だから。もう一人で大丈夫。やっていける。ううん、やっていかなきゃ。
女２　そんな事言ったって、今だって私達の協力が無いと大切な事も思い出せなかった訳でしょ？全然ダメじゃん。
女１　だから無理しなくていいの。穂乃花は今まで通り私達が守ってあげるから。ちょっと背伸びしたくなっただけなんだよね。
穂乃花　ごめんなさい。でも私は私の人生を生きたい。
女２　ねぇ、それ止めてよ。今だってあんたは「あんたの人生」生きてるでしょ？
女１　私達穂乃花が困った時しか出てきてないわよね？
穂乃花　でも私の時間が、
女２　それは仕方なくない？ツラいの嫌だったんでしょ？
穂乃花　でもこれからは、
女２　「でもでもでも」うるさいんだけど!!今までさんざん守られといて流石に勝手すぎるでしょ。自分でもそう思わない？思うよね？
穂乃花　ごめんなさい。でもこの体は元々私のものだから。

女1　それはたまたま順番がそうだっただけでしょ？この体から生まれたのは皆一緒なんだから。

女2　一番最初に生まれたからって独り占めして良いとは言えないと思うけど。
生きてく資格ってだけならあんたみたいなコミュ障より私の方が断然社会の役に立てますけどね。

穂乃花、小さい声で何かを呟く。

女2　え？

穂乃花、再び呟くが聞こえない。

女2　聞こえないんだけど。何？

穂乃花、同じことを繰り返す。

女2　やっぱダメじゃん！自分の主張も大きな声で言えないなんてさ。穂乃花は今まで通り大人しく守られてなさいよ‼

穂乃花　この体は私のものだから‼

女1　何で急にこんな事言い出したのかね。・・・思春期かな。自分の部屋が欲しい的な。
女2　ウッザ。
女1　ねぇ、穂乃花。どうしてもこの体独り占めしたいの？
穂乃花　この体は私のだから。
女1　まぁ、主人格なのは確かだけど・・・それなら・・・。

女1、穂乃花の手首を持つ。爪のない痛みに顔をゆがめる穂乃花。

女1　あんたさ、小さい頃情緒不安定になると爪噛む癖があったの覚えてない？何かあるとすぐ爪噛んで。その度にお母さんに怒られたんだよね。
女2　その癖が何で無くなったか分かる？私達が居たからでしょ!!私達があんたの不安を引き受けたからでしょ!!
女1　だから爪を噛まなくて済むようになったわけ。でさ、私達の存在が不要って言うならさ、私達が居なかったらかじってたはずの爪を無くしなさいよ。それで初めて話の土台に立つ資格があると思うんだけど。
穂乃花　・・・え？
女1　さっきも言ったでしょ？「これは協力してあげてるんだ」って。
穂乃花　え、何で？

女1　仕方ないわよね？どうしてもって言うならさ、一人でも大丈夫だっていう証明をしなきゃいけないし。その為にはまず私達の助けが無い状態にならないと。本当はこんな事したくないのよ？でも仕方ないじゃない。あんたがそうしたいって言うんだから。

穂乃花　ちょっと待って‼

女1・女2、穂乃花の爪をはがし始める。穂乃花、痛みに悲鳴を上げる。女1、動作を止めて

女1　ね、痛いでしょ？今まで通りならこんな思いしなくていいんだから。

女2　言っとくけど爪が全部無くなってからが本番だからね？一人でやっていけるって証明してもらうのはこんなんじゃないから‼

穂乃花　この体は・・・私の。

女1　まだ言うの・・・。

女1、再び力を入れて爪をはがそうとする。穂乃花の悲鳴。今度は力を入れたまま。

女1　どう？痛いでしょ？止めて欲しかったらごめんなさいは？

女2　守られてればいいのに何でこんな痛い思いするわけ？そんなに独り占めしたいの？

女1　ごめんなさいしたらすぐ止めてあげるし、今まで通り守ってあげる。だって怒ってるわけじゃ

女２　ないから。
女１　どんだけ強欲なんだよって話でしょ。今までだってほとんどの時間を使ってきたくせにさ‼
穂乃花　ほら、ごめんなさいは？
女２　この体は私の‼
女１　もう肉ごといっちゃうよ⁉
女２　早くごめんなさいしないともっと酷い事されるのよ⁉
女１　指の骨全部折ってあげようか‼
女２　それともこのはいだ指先に釘を打ってあげようか⁉
穂乃花　この体は私の‼
女２　いっそ全部やってあげる。それでもいいの⁉
女１　早くごめんなさいって言いなさい。そしたら止めてあげるから‼

女1・女2、更に力を込める。穂乃花の悲鳴。穂乃花、悲鳴の中大きく息を吸って大きな声で

穂乃花　この体は私の‼

穂乃花の振り絞った声を聞いて、女1・女2、動きを止める。穂乃花、痛みが治まらない中、数回小声で「この体は私の」と繰り返す。その様子をじっと見る女1・女2。

女1・女2、大きくため息をついて優しい顔になる。

女2　そっか・・・。もうそんだけ覚悟してんだ・・・。（女1に）・・・ね？

女1　うん・・・。何か、嬉しいような寂しいような・・・。こういうのってやっぱり急なんだね・・・。

女2　あーあぁ。私達の役目もここまでか・・・。

女1、穂乃花の傷ついた左手を優しく包む。

女1　よく頑張ったね。

女2、穂乃花の頭を優しくなでる。

女2　ホラ、いくら痛いからっていつまでも泣いてちゃダメでしょ。ここは我慢してグッとこらえなきゃ。

女1・女2、穂乃花が落ち着くまで待ってやる。穂乃花、呼吸を整えて、

穂乃花　・・・お姉ちゃん？

女２　もう分かったから。…充分分かったから。本当良く頑張ったね。
女１　それだけの覚悟があるならさ、ちゃんと認めないと。穂乃花は一人でもやっていけるって。
女２　仕方ないよね。…本当はもっと一緒にいたかったけどさ。
穂乃花　…怒ってる？
女２　そんな訳ないでしょ？嬉しいに決まってるじゃん。ただ…どうしても寂しいなって思っちゃうけど。
穂乃花　…ごめんね。本当に感謝してるんだよ？でも…ごめんね。
女１　謝んなくていーの。私達は穂乃花の味方なんだから。…ただこれから一人で生きるって、今よりももっともっと痛い事が待ってるんだからね？身体の痛みだけじゃなくて、精神的にもツラい事がたくさんあるんだからね？…その時にはもう私達はいないからさ。守ってあげられないから…。ちゃんと頑張るんだよ？
穂乃花　うん。
女２　「そんな時は今のこの痛みを思い出せ」って言いたいけど、一人で生きていくっていうなら忘れた方がいいんだろうね。私達の事も。
女１　そうだね。寂しいけどね。
女２　寂しいけどね。
穂乃花　忘れなくちゃダメ？
女１　自分の人生生きるんでしょ？なら私達の事は忘れなきゃ。忘れて前に進まなきゃ。

穂乃花、しばらく考えてハッキリとうなずく。女1、女2、その姿を見て穂乃花を優しくなでる。女1・女2、目が合いうなずく。

女2　…じゃあね。絶対幸せになんなさいよ？
女1　穂乃花は穂乃花のペースでいいから。…しっかりね。
穂乃花　ありがとう…お姉ちゃん。

女1・女2、膝をつき、それぞれが穂乃花の手を取る。

女1　おやすみ。
女2　おやすみ。
穂乃花　…おやすみなさい。

女1・女2、穂乃花の手に頭を乗せるようにして眠りにつく。照明徐々に暗くなっていく。暗転になって終わると思われる瞬間、再び明かりが付き、女1・女2が頭をあげる。

女2　あ、たださ。

穂乃花　え。え？
女２　さっきから私達の事ずーっと「お姉ちゃん」って一括りにしてるけど、私にも「乃堵佳（のどか）」っていう素敵な名前があるからね。
女１　（自分を指して）結希乃（ゆきの）
穂乃花　乃堵佳お姉ちゃん…。結希乃お姉ちゃん…。

女１・女２、嬉しそうな顔をする。

女２　うん！やっぱり名前を呼んでもらえるって嬉しいね！
女１　嬉しいよね。…他の人は知らないから皆穂乃花って呼ぶけどさ。あんたはちゃんと呼んでくれないと。
女２　本当そーゆーとこだぞ。
穂乃花　うん、ゴメン…。
女１　ね、もう一回呼んで。
穂乃花　結希乃お姉ちゃん。
女２　あ、私も。
穂乃花　乃堵佳お姉ちゃん。
女１　うん、いいね。存在してるって感じだよね。

女２　たたかれるより蹴られるより気持ち良いって感じだよね‼
女１　ごめん、それ分かんない。
女２　ちょっと‼
女１　特殊な性癖に同意を求められてもさ。
女２　特殊言うな。

女１・女２、楽しそうに笑う。

穂乃花　えっと・・・。
女１　あーごめん、ごめん。嬉しくってつい盛り上がっちゃった。私達で名前呼びあってもここまで嬉しくないのにね。何でだろ。やっぱり主人格って特別なのかね。
女２　それはあると思うよ。副人格の悲しさってやつかな。
穂乃花　そんなに喜んでくれるならもっとたくさん呼べば良かったね。結希乃お姉ちゃん。・・乃堵佳お姉ちゃん。

女１・女２、嬉しそうにする。

女２　もーこの喜ばせ上手‼　・・じゃあそんな愛すべき妹に私から特別なプレゼント。はい。

女2、マイムで何かを取り出した仕草。

穂乃花　…鏡？

女２　そ。見てご覧。面白いものが見れるから。

女2、穂乃花に鏡を渡す。鏡を見る穂乃花。信じられないものを見たように動きが止まる。

穂乃花　…お母さん？（自分の顔を触って確かめる）

女１　ね。娘って父親に似るって言うけどさ、あんた完全にお母さん似だよね。あ、ただ、ほら。あんたまだ若いからここにシミ無いでしょ。

穂乃花　（女1、女2を交互に見て）…どういう事？

女1・女2、その顔を見て大笑いをする。（決して意地悪な笑いではなく、純粋に面白いものを見たときの明るい笑い）

女２　（笑いをこらえながら）どういう事も何も、それが今のあんただから。

穂乃花　…え？

女２　何て言えばいいんだろ。・・・ラーメン食べた時のチャーシュー？焼き鳥食べた時のネギ？まぁ何でもいいんだけどさ、奥歯に食べ物が挟まると凄い気になるじゃん？舌先使っても爪楊枝使っても取れなくてさ、それがずっと残ってるの。もうイライラするんだよね。「あー‼」って。

女１　その例え分かる～！

女1・女2、共感して盛り上がる。ひとしきり盛り上がった後、一瞬で素に戻り、

女１　あんたってさ、そういう存在なの。

穂乃花　・・・え・・・？

穂乃花が話出しそうなのを遮って。

女２　寝てるクセにずっと頭の中にいてさ。常に見られてるような感じがして落ち着かないわけよ。やっぱり体との相性が一番良いのは主人格なんだろうね。・・・だから私、あんたには消えて欲しくてさ。

女１　だからわざわざこんな面倒な計画立てたわけ。

穂乃花　計画って・・・結希乃お姉ちゃん。

女１　（名前を呼ばれた事に喜んで）ありがと。でもダーメ。ちゃんと絶望してもらわなきゃいけないから。生きる希望を一切無くしてもらわなきゃ。

穂乃花　乃堵佳お姉ちゃん！

女２　（喜びつつ）あんた今「いつ」だと思ってる？

穂乃花　え？

女１　夕方小学校で倒れて…今、その日の夜だと思ってるでしょ。

穂乃花　違う…。

女２　（遮って）24年。……（反応を待って）24年経ってるから。あれから。

穂乃花　…24年…？

女１　あんたの大好きだったお母さんはもういないわよ。15年前に他に男作って出てったからさ。それっきり連絡もとってないし。

女２　私達それぞれ勉強して今ＳＥとして働いてるのね。分かる？ＳＥ。完全に専門職だから。

女１　24年も経つと生活も全然変わってるよー。ま、私達には便利だけど、今の生活様式に慣れるのは相当大変だろうね。

穂乃花　…なんで？

女１　ねぇ、9歳のあんたが今から24年後の世界で生きていける？お母さんもいない。友達もいない。仕事は専門職。銀行口座の暗証番号だって知らない。そんなあんたが33歳として生きていける？

女２　無理だよね？
女１　絶対無理よね？だったらさ。
女２　その体‼
女１・２　私に寄こしなさいよ‼

女１・女２、穂乃花に襲いかかる。
穂乃花・女１・女２の絶叫。しだいに暗くなる。
女１・女２、袖にはける。明かりが付く。
穂乃花が下を向いている。やがて目を覚まし、辺りを見回す。
ここが病院である事を理解し、安堵のため息。目の前に医者がいる事に気づき、

穂乃花　もうちょっと何か変化があると思ったけど・・・こんなもんか。まぁ、スッキリはしたかな。・・・何？がっつかないの。後でタップリご褒美あげるから。

穂乃花、チキチキとカッターを鳴らす。

穂乃花　しゅう君・・・。

穂乃花、大きく深呼吸をして、

穂乃花　おはよう。

穂乃花、言い終わった後、ゆっくり笑い出す。
笑顔が完成する瞬間、暗転。
完成した笑顔は誰の・・・

【幕】